
バカとFateと召喚獣

ヨッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとFateと召喚獣

【Nコード】

N5860Z

【作者名】

ヨッキー

【あらすじ】

もし文月学園にFate/stay nightのキャラがいたらという作品です。

Fate側のメインキャラは士郎とセイバーと凜、バカテスはメインキャラは原作と変わらない予定です。

若干キャラの性格が変わっているかもしれませんがご了承ください。

処女作なので文などがおかしかったりするのでそういうところはどうか御指摘ください、またアドバイスなどもお願いします。

プロローグ(前書き)

はじめましてヨッキーです。変なところなどがあると思いますがどうか暖かい目で見守ってください。

プロローグ

雲が少しだけ浮かぶ青空。

満開に咲き誇る桃色一列の桜並木。

道行く人は皆希望に胸を膨らませる。

そんな青空も、そんな桜並木も目の端に追いやり希望に胸を膨らませることもなくただ三人は走っている。

そんなとき突然、黒髪のツインテールを激しく揺らしながら走っている少女　遠坂凜は叫ぶ。

「なんでこうこうなったのよ！」

その叫びに金髪を後ろで結んでいてアホ毛が特徴的な少女　アルトリア・S・ペンドラゴンセイバーが答える。ア

「凜がギリギリまで寝ていたからじゃないっすか！」

「セイバーもギリギリまでご飯食べてたじゃない！」

「いや凜が」

「いやセイバーが」

二人の口論は次第に激化してゆく。その口論に挟まれている、朱色の髪をした少年　衛宮士郎は耳をふさぎながらも懸命に走っている。

だがその少年もやがて痺れを切らしたのか、

「遠坂もセイバーも喧嘩しながら走しらないでくれ……」と、ため息をつくようにつぶやいた。

この三人が向かっているのは文月学園。文月学園とは、科学とオカルトと偶然によって生まれた『試験召喚システム』により召還者をデフォルメした姿の『召喚獣』を学力低下の対策としているの進学校ことである。

そしてここ　　文月学園が今回の物語の舞台である

プロローグ（後書き）

これからよろしく申し上げます。
また、アドバイスをいただけると幸いです。

第一話 クラス発表（前書き）

第一話目です。よろしくお願ひします。

第一話 クラス発表

士郎は走りながらも振り分け試験のことを考えていた。

1年の最後にあつた振り分け試験最中、具合が悪くなつて途中退場した生徒が無得点扱いになることを抗議していた友人 吉井明久がいた。

その近くには桃色の髪の少女がとても熱っぽい赤みがかつた顔をしていたのでそのこのためだと思つた。

もともと、困っている人などをどうしても放つて置けない士郎だ、そのやり取りをただ見ていることはできなかつた。

結局、自分&明久VS試験監督の先生の口論は激しくなつていった、それを見るに見かねた遠坂がその口論の仲裁に入った結果なんとかその口論は終わることができた。

だが、テストの最中に話せば無得点になるのは確実のため自分と明久の無得点は納得がいく。

しかし、止めに入った遠坂までもが無得点扱いなの納得がいかなくかつた。

これに抗議しにいこうとしたところ遠坂本人が「別にいいわよ」といいながら止めてきたのでしぶしぶ行くのをやめた。

そのあと、テスト中にうるさくしてしまった為、明久と一緒に同じ教室で振り分け試験を受けていたやつらにもすごく文句を言われたのは余談である。

「校門が見えてきたわよ！」その声に物思いにふけていた土郎の意識は戻された。

「お前たち遅刻だぞ！」声だけでもアイテの大きさが想像できてしまふ声が三人にふりかかる。

声のするほうに目を向ければ浅黒い肌に黒髪の短髪、鍛え上げられた筋肉を持つ大男　西村　宗一またの名を鉄人がいた。

「おやようございます西村先生」先ほどまでとはまるで違う優等生オーラを身に纏った凜が挨拶をした。

「おはようございます西村先生」凜に続くように土郎も挨拶をする。

「おやようございますテツジン」セイバーも続いて挨拶をするが、『テツジン』という一言により西村先生は眉をひそめる。

「俺を毎回堂々と『鉄人』と呼ぶのはお前だけだぞセイバー……」とつぶやいたが西村先生は一回咳払いをすると、

「それよりお前からこれを受け取れ」といいながら三つの封筒を手渡ししてきた。

「衛宮、お前は困っているやつとかを放っておけない優しいやつなのはわかってる。だけど自分も大切にしろよ」突然の西村先生の言葉に土郎は弱弱しく返事をした。さらに西村先生は続けて、

「すまん遠坂、お前の無得点を取り消してやれなくて……」とすまなそうに言う。

「いえ、西村先生お気持ちだけでうれいすよ」と凜は笑顔で返す。それに西村先生も苦笑。

どこか優しい気持ちに包まれている西村先生と土郎と凜に対し、「テツジン私には何か無いのですか？」と不服そうにたずねると、「食ってないで少しでも勉強しろ……」と悲しい返答が返ってくる。

土郎と凜の笑い声が聞こえる、

「な！ 二人とも笑わないで下さい！」とセイバーが赤顔をしながら叫ぶ。

「まー、お前ら一年間がんばれよ……………」

Fクラス

で

このときから2年Fクラスを中心とした、文月学園のバカ騒ぎが始まったのである。

第一話 クラス発表（後書き）

週に1〜2回多いときは3回くらいの投稿ペースでいききたいと思
います。

第二話 王がいるAクラス（前書き）

バカテスト

第一問

問 いかの問いに答えなさい

『調理の為に火をかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを選んだのだが、調理を始めた際問題が発生した、この問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

衛宮士郎と遠坂凜の答え

『問題点……マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点。合金の例……ジェラルミン』

教師のコメント

「さすが二人とも勉強をしていますね、大変感心します。振り分け試験は残念でしたがどうかがんばってください」

セイバーの答え

『問題点……おなかが減っていた 合金の例……金粉』

教師のコメント

「すべて食関連なのですが……」

ギルガメッシュの答え

『問題点……この我（オレ）の許可を得ていなかったから教師のコメント

「別にあなたの許可は必要ないと思います」

第二話 王がいるAクラス

士郎たち三人は靴を下駄箱に置き階段を上る。歩きながら士郎は遠坂の様子を見ていた。

遠坂はFクラスという結果を覚悟はしていたみただが、やはり悔しそうにしている。遠坂ほどの実力があれば、よほどのことがないかぎりAクラスは確実だっただろう。それが自分と明久のせいでバカの集団であるFクラスになってしまったのだ、ただ頭を下げることしかできなかつた。

「本当にごめんな、遠坂」

「Fクラスはやっぱ悔しいけど、別にいいわよFクラスでがんばればいいじゃない」

「いや、だけど……」

「衛宮君が気にする必要はないのよ？ 私が自分の意思で止めに入っただけだから」

「遠坂……」

三階に到着したとき不意をついたようにある方向に指を差しながら「シロウ、凜この無駄に広い教室はいったい何ですか？」とたずねてくる。

セイバーの一言に俺と遠坂は一斉にセイバーが指を差しているほうを見る。

「何よ、この広い教室……」遠坂は呆気にとられている。

「ここは……Aクラスだな」と俺が答える

三人は大きめの窓から中を覗いてみる。

するとそこにはいかにも知的女性という教師が教壇の前に立っていた。

「皆さん進級おめでとございます。Aクラスの担任になりました高橋洋子です。1年間よろしくお願ひします」その言葉と同時に後ろのディスプレイに名前が映し出される。

「な、な、何よこれ！ 個人にノートパソコン！ エアコン！

冷蔵庫！「冷蔵庫ですか！ それは本当なのですか凜！」 そのほかにもいろいろある？ どんだけお金使ってるのよ！」遠坂が怒りの形相で文句を言う。

「た、確かにこれは高級ホテルみたいだな……」俺も遠坂の言ったことにうなづく。

高橋先生はクラスについての説明が終わったらしく次の行動に移った。

「それではクラス代表の生徒を紹介します。前に出てきてください」と高橋先生が言うと、一人の黒髪の長髪の美少女が教壇に向かって歩いていった

「……………霧島翔子です。よろしくおね「待て、雑種」……………」霧島が挨拶をしていたとき、金髪の少年が挨拶の言葉を遮った。

「この我、^{オレ}ギルガメッシュ・ウルクを差し置いてこのクラスの王になるだと？ 万死に値する」

「いえ、王ではなく代表なのですが……………」と高橋先生の突込みが入る。

「戯け！ このクラスを率いるのやつが必要なのであろう？ すなわち王が必要ということではないか！ ならば王であるこの我^{オレ}を差し置いて誰がこのクラスの王になる？」ドヤ顔を決め込むギルガメッシュ。

「いえ、王は必要ではありません。しかも、あなたがこのクラス
の代表になったら学級崩壊する気がします、いえ、絶対します」高
橋先生は若干切れ気味である。

「衛宮君、あなたあれは止めないの？」凜があきれ顔でたずねて
くる。

「いや、俺もあいつの相手をしたくない……」と苦虫を噛み潰し
たような顔で答える。

「シロウ、凜早く行きましょう」セイバーがいきなり不機嫌にな
り出した。

そして最悪の事態は起こった。

高橋先生と言い合いをしていたギルガメッシュがふと横を向くと、
ちょうどセイバーが見られてしまった。

「おお、セイバーではないか！ 我オレに会いにきたのだな、ういや
つよ」と心底うれしそうな顔で近づいてくる。

「よらないで下さいストーカー王」

「照れているセイバーもまたよい」

「く、もう無理ですシロウ、凜私は先に行きます」案外ギブアッ
プの早かったセイバーである。それもそのはず、さすがに会うたん
びこの調子でこられたら誰だってひく。

ものすごい勢いでダッシュしていくセイバー。それをニヤニヤし
ながら見るギルガメッシュ。はつきりいって後者はただの変態にし
か見えない、てか変態だ。

「遠坂、教室行こうぜ……」

「そ、そうね…… 私Aクラスじゃなくてよかったかも……」

一人は早足でFクラスに向かっていった。

第二話 王がいるAクラス（後書き）

感想などよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5860z/>

バカとFateと召喚獣

2011年12月23日04時03分発行